

はじめに

盛岡のまちづくりは 16 世紀末、南部氏 26 代信直公の盛岡城の築城に始まります。

城下町建設に当たり、軍事や商業、交通を考慮して町割りを五の字に配し、城を二重、三重に取り囲む環状市街地が形成されました。これが現在の中心市街地の骨格となっており、城下町の情緒が今もまちなみに色濃く残っています。

玉山は江戸時代から馬や薪炭の生産地として栄え、浜民や藪川では街道沿いに村落が形成されました。

城下町として発展してきた盛岡も明治維新を経て、近代都市の建設が始まります。

明治 22 年に市制を施行し、盛岡市が誕生しました。

翌年の東北本線の開通とともに盛岡駅が開設され、これが市中心部と盛岡駅を結ぶ幹線道路の整備を促し、交通体系や産業振興に転機をもたらします。また、明治 24 年に駅が開設された好摩では、その周辺に市街地が形成されました。

大正時代は鉄道新線や周辺鉄道駅の開設が相次いだことから交通結節点としての機能が高まり、また昭和 5 年に都市計画区域を定め、市中心部で行なわれた土地開発や耕地整理は市街地整備の基礎となりました。

戦後は戦災復興土地区画整理事業や市街地開発が進み、昭和 30 年代は市街地周辺の宅地開発が進行しました。

昭和 45 年の岩手国体を契機に都市施設の整備が進み、現在の商業地が形成されて都市機能の拡充が図られるなか、盛岡広域都市計画区域が定められました。

昭和 50 年代には、高速自動車道の開通と新幹線の開業により、交通基盤整備に合わせ、経済圏の拡大、生活圏の広域化が進みます。玉山では、国道沿いに住宅や商業、工業等の土地利用が進み市街地が形成され、平成 2 年に盛岡広域都市計画区域に編入されました。

平成 6 年には、本市の南西部に市街地の形成を図る盛岡南地区開発が事業認可され、現在の都心部から盛岡駅西口地区を経て盛岡南地区に連担する新しい都市軸の形成をめざすことになりました。

平成 4 年には都南村、平成 18 年には玉山村との合併が実現し、都市のスケールアップが図られました。

21 世紀を迎え、また地方分権社会に移行する中、新たな広域行政の形成などを図りながら、北東北の交流拠点機能を担う中核市として、本市は着実に歩み続けています。

